

中心市街地活性化におけるイベントとしての朝市の開催 ～ようこそ高崎人情市とその運営主体について～

実査日：平成 25 年 2 月 24 日

報告者：財団法人都市化研究公室研究員岩間真二

1. はじめに

中心市街地の活性化に関する手当の一つとしてイベントの開催がある。その中でも定期的で開催することが一定数のリピーターを生む効果があり有効な手段の一つである。もちろんそのイベントのコンテンツとしての価値が高い物でなければ継続することが難しい。

本調査対象の高崎人情市は平成 11 年以来 12 年以上にわたりほぼ月一回開かれ、調査日当日で 164 回を数えている。また元々は高崎市や卸売市場が主体として実行委員会形式として行っていたが、その継続性のため平成 14 年に NPO 法人高崎やるき堂を立ち上げ、観光協会より委託を受け行政主導からの転換を行っている。

本調査では、その NPO 法人高崎やるき堂代表理事へのインタビューならびに人情市の実地調査を行い、当日の中心市街地の状況を調査することでイベントの開催における中心市街地への波及効果を考察する。



ようこそ高崎人情市

2. 高崎市の中心市街地

- 概要

高崎市は、群馬県南部に位置し、県庁所在地である前橋市と並んで群馬県の主要都市となっている。平成 18 年 1 月に旧倉淵村、旧箕郷町、旧群馬町、旧新町と、10 月には旧榛名町と、平成 21 年 6 月には旧吉井町と合併し、人口約 37.5 万人、世帯数約 15.6 万世帯、面積約 459 km²である。平成の合併により人口は県内で最も多く、太田市・伊勢崎市に次ぐ製造品出荷額（平成 24 年経済センサス - 活動調

査（製造業）結果速報）となっている。平成 23 年 4 月 1 日には、中核市へ移行している。

だるまが特産品で、全国シェアの 80%を占める。

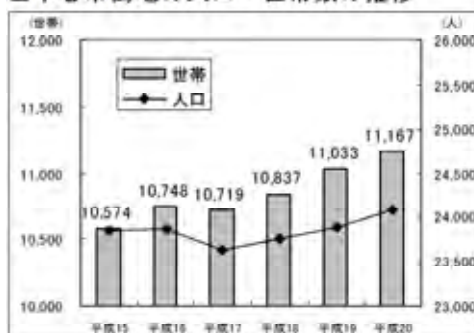
- 中心市街地

中心市街地活性化基本計画（平成 25 年 3 月 29 日変更）による中心市街地概要は以下の通り。

<p>2)中心市街地の位置づけと概要</p> <p>旧高崎市のほぼ中央部に立地</p> <p>旧法の基本計画で位置づけられている中心市街地は、旧高崎市のほぼ中央部、高崎駅周辺に位置し、旭町、高松町、田町、連雀町などを含む約 245ha の区域となっている。</p> <p>商都・高崎の中心、交通の拠点として発展</p> <p>江戸時代、高崎は「お江戸見たけりゃ、高崎田町」と呼ばれ、中山道随一の宿場町、城下町であるとともに、絹市場が開かれてからは、生糸などの交易が活発な商都として発展を遂げた。この当時の中心商業地は、田町、本町など現在の中心市街地北部に位置していた。</p> <p>近代に入ってからは、1884（明治 17）年の高崎線の開通を始めとする鉄道や道路の結節点として県内の交通の拠点、商業都市としての性格が強まり、1960 年代以降には、中心商業地にデパートが立地するなど商業集積が高まった。こうした中、中心商業地は、中央銀座通り、さらに、慈光通りや、鞆町、連雀町へと次第に高崎駅のある南部に向かって移行した。これら高崎市の歴史や伝統を形成してきた中心市街地は、昭和 30 年の時点では市全体の人口の約 1 / 3 を占め、商業面でも、その中心であったが、近年では、1982（昭和 57）年に上越新幹線、1997（平成 9）年に北陸新幹線が開通し、高崎駅の交流拠点性がさらに高まり、八島町を中心とした駅西口周辺に商業の中心が移ってきている。</p> <p>現在の中心市街地では、百貨店、商店街を中心に様々な年齢層による消費がみられる中、若者の消費が市外からの流入も含め目立っているが、近年、郊外の大型小売店の出店等により、中心市街地における小売業の店舗数、年間商品販売額や、それぞれの全市シェアは、年々低下してきている。</p> <p>活発な文化活動と公共公益施設の集積</p> <p>中心市街地では、市内外の多くの人々が参加する文化活動やイベントが数多く行われており、とりわけ音楽活動は、群馬交響楽団の戦後からの活動や、高松町に建設され、市のシンボルにもなっている群馬音楽センターの存在などにより、文化の象徴として多くの人に支持されている。また中心市街地には、市役所、群馬音楽センター、高崎市美術館、国立病院機構高崎病院、高崎シティギャラリー、群馬シンフォニーホール、郵便局、税務署、法務局など多くの公共公益施設が立地している。</p> <p>中心市街地活性化基本計画（平成 25 年 3 月 29 日変更）より抜粋</p>

同書によると中心市街地における人口は平成 17 年頃まで微減を続けていたがその後微増に転じており、中心市街地におけるマンション建設が主な要因としてあげられている。

■中心市街地の人口・世帯数の推移

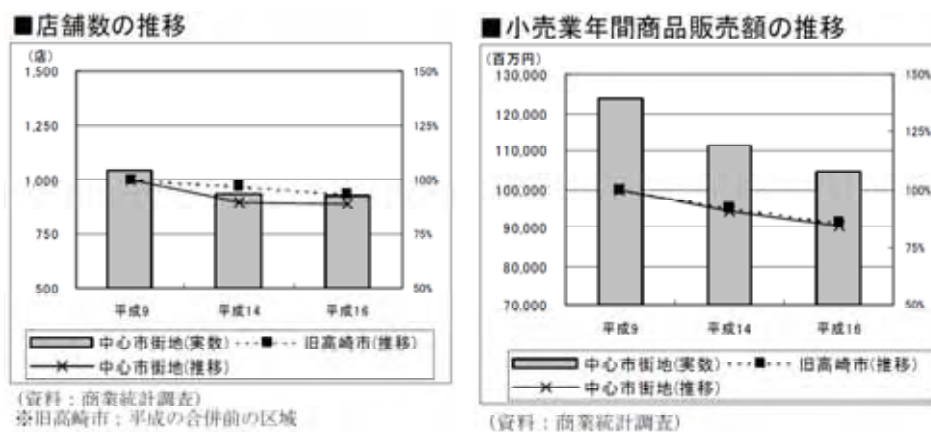


(資料：住民基本台帳)

中心市街地活性化基本計画（平成 25 年 3 月 29 日変更）より

高齢化率は、平成 20 年全体でおよそ 20.9%、中心市街地で 26.5%と 5.6 ポイント程度高い。

中心市街における店舗数は減少しており、小売業年間販売額も減少しており、中心市街地の商業的低迷が指摘されている。



中心市街地活性化基本計画（平成 25 年 3 月 29 日変更）より

中心市街地には、高崎駅の西口北西側を中心に 24 の商店街、東口に 1 商店会が形成されている。



高崎の中心市街地

大型小売店は 1 万²以上のものは 8 店舗うち 4 店舗が中心市街地に立地しており、中心市街地活性化基本計画では「高崎市内では郊外における大型小売店の立地は顕著ではなかったが、近年、店舗面積が 4 万²超の「イオンモール高崎」が群馬地域に進出し、また、隣接する前橋市に店舗面積が 3 万²超の「けやきウォーク前橋」がオープンしており、中心市街地の商業に及ぼす影響が懸念されている。」と評価している。

中心市街地の人口の増加とは裏腹に、商業における低迷が示されており、新規住民に対して中心市街地の商業がそのニーズをくみ切れていない現状がうかがえる。

本節における数値等の出典は「中心市街地活性化基本計画(平成 25 年 3 月 29 日変更)」による。

3. ようこそ高崎人情市

- 高崎人情市の概要

高崎人情市は毎月第4日曜日、高崎市のもてなし広場で開催される朝市とフリーマーケットとして開催されている。平成25年2月において164回開催されている。もてなし広場は高崎駅から中心市街地を抜けた市役所などのある場所にある。



もてなし広場

高崎人情市の前身となる「高崎朝市」は平成10年より高崎駅の西口北側で行われており、当初月2回の開催であった。その後平成12年、現在の場所に場所を移し、月1回の開催を続けている。

人情市では、朝市、フリーマーケットの他、飲食やイベントなども行われている。開催時間は朝8時より午後3時まで行われる。

人出のピークは午前10時ごろ、多いときで3-4千人程の人出があったとのことである。



人情市の様子

- 高崎人情市の運営

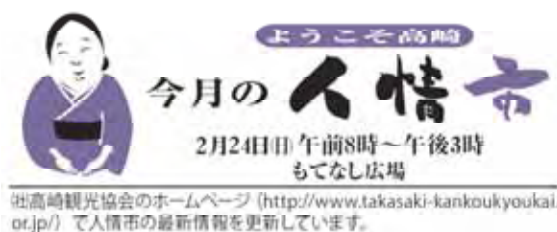
当初、高崎人情市の運営は実行委員会方式で行ってきたが、次第に人数が減ってきたことに伴い、NPO法人「高崎やるき堂」を立ち上げ運営を行っている。

NPO の運営としては観光協会よりの委託費と出店料（区画 2000 円）で賄っており、財政的には人件費が出る状況ではないということである。

人情市の周知方法としては NPO 法人および高崎市観光協会のホームページによる告知のほか、高崎市の広報、チラシ、前日に高崎駅からの道のりで掲示するのぼり（こちらはアルバイトを使っているとのこと）、地域のラジオ高崎での告知などによって集客している。



人情市チラシ



広報誌の宣伝（催し欄）

- 当日の様子
 実査日は、非常に風が強くまた気温も低かったため、事務局の方によると非常に入出が悪いとのことであった。



人情市の様子

それでも、常連さんは来てくれるようで、開始時間と共に訪れる人もあった。特に冬季は人出が良くないとのことであるが、毎月定期的に行っていくことが大事であり、不定期だとお客が付きにくいとのことである。

また、近年は東日本大震災の被災地からの出店もあり被災地との交流という面もあると見受けられた。

時間ごとにイベントが催され、当日は雷舞 3 団体、紙芝居やパン焼きの体験、しちりんでのホルモン焼き、じゃんけん大会や歌手によるステージなど多くのイベントが行われた。



イベント（雷舞）の様子

4. おわりに

平成 10 年より 15 年に渡り 160 回以上の開催という継続性が本イベントの意義の一つとしてあげられると感じられた。中心市街地の活性化はやはり一過性のイベントの開催では一時的な盛り上がりや意識の向上への効果があっても、継続性が無ければ長期的な活性化へ道のりを歩むことが困難であり、また活性化は長い期間を要するものであるからである。その点において定期的にこのような催しを行っていることへの地域の意欲と継続性は大いに評価したい。

また、立地として中心市街地を抜けたところにあり、中心市街地との回遊性を期待でき、うまく地域と連携していけばより大きな効果が期待できるが、現在のところそこまでの取組みが充分とは言えず今後の課題となっているのではないのだろうか。もちろんこの点に関しては人情市を開催する側だけの責任ではなく、もっと地域がこのイベントに便乗して中心市街地でもそれにリンクしてアクションを行うような好循環が行われていくことが理想であり、このことも事務局の方へのヒアリングでも、今後の課題として話されていた。

今後、本来の目的である中心市街地活性化のため多くの主体による参加やコラボレーションなど、高崎の中心市街地の活性化へ効果の発揮を期待したい。